

たくさん狙われるトレーナーくん

タソ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

トレーナー君の安寧をさがせ

四重奏

ケミカルモンスター

ちよつと工事中

目次

珈琲店【紐育下町】	1
茶請けは錠剤	10
芦毛の怪物がやってくる	20
女帝が来る	32
黎明期	42
終わりの始まり	50
脈動	60
青い春の兆し	72
神域	82

## 珈琲店【紐育下町】

とある学園の一部屋。どうしてだか特定の人物のみしか立ち入ることが出来ない。

しかしながらその部屋に近づくにつれ、芳ばしい香りが漂ってくる。道行く人はその傍ら、小首を傾げながら、あるいは指をくわえながら通り過ぎてゆく。

誰にも気づかれぬその部屋の主人は今日も静かに密やかに、静謐のもと、豆を煎る。

——やあ、やっぱりやってるね

「…あ、トレーナーさん。いつもより早いですね」

——まあね。今日は急かす連中が多くてね

「ああ、それで…」

そう言つて来客の背後に目を向ける。困つたような、懐かしむような、茫洋とした目元が綻ぶ。

見えぬナニカに殴りつけられて目を白黒させていれば、時計の針を糸巻きのように回され、天井灯でモールス信号を焚かれる。当然何も手につかなくなつて、いつもより早いがこの場所に足を運ぶ流れとなつた。

ただ足繁く通つてはいるが、いつもどのようにとどり着いているのか定かではない。席を立ち、気が付けば、その戸に手をかけている。

——何か変わったことでも始めたのか？

「いえ、いつもより準備を早めました…」

——…それだけで彼らは気が立つのか？

「ふふ…やあ…？」

——全く、自分たちだけで行けばいいものを

「……トレーナーさんは、ご迷惑でしたか…？」

——ああいや、そういう意味じゃないんだ。

…もちろんこの時間は楽しみにしているし、好きだよ。ただ毎回私の業務を遮ってまでせつつかれるのはどうもね

「…そんなことを、していたんですか」

咎めるような幾分ひそめられた声。部屋の空気が止まる。見えはしないが、連中が非常に慌てていると想像にかたくない。主人の視線はあちらこちらに飛び回る。その瞳の動きに背筋に薄ら寒いものが走る。

——そんなにいるのか

「あ、はい。今日は満員ですね」

あつけらかんと言う。1人や2人、3人くらいなら許容範囲だが、大所帯で後ろに付かれるのは勘弁して頂きたい。最初こそ怖気が走る度、部屋の主人をお願いして離れてもらったが、慣れとは怖いものだ。

——…もし

「は…？」

——離れてもらうよう伝えてくれないか

「…慕われていますよ？」

心底嬉しくないが、そう言われてしまうと何人いるかも分からない彼らと袂を分かつのもはばかられる。合縁奇縁、あやかしの類とはいえこれまでと断じるのは憚られた。

——じゃあいい

「そうですか」

口角を上げつつも、うさぎも狩らんという速さで肯定してきた。さては伝える気もなかったな。

——オリジナルブレンドで

「はい」

手際よく豆が挽かれ、ミルの震えるような高い音が室内を駆け回る。特に何をするという訳でもなく、ただ漫然と、しなやかに蠢く彼女の手元を眺める。

白魚のような指先に、ため息の出るようなたおやかな所作。

主人が息を飲んだ。

蒸らしの時間だ。

先生と教え子のような距離があるにもかかわらず聞こえる豆の開く音。そして鼻腔をくすぐる深い香り。その香りを惜しむような遠慮がちな呼吸音。

——深呼吸でもすればいい

「…集中し過ぎです。貴方はウマ娘ですか」

僅かに頬を染め、口をとがらせる。主の思いとは裏腹に口元が歪んでいくのを自覚する。喉の奥でくつくつと音が鳴った。

「…貴方今タキオンさんそっくりの顔をしています。不愉快です」

——それは悪かった。しかしタキオンが絡みに行きたくなる理由もわかる。

「分からないでください。貴方は、いつものままで」

——ああ

曖昧に返事をする。突如として視界がぼやける。急激な眠気が襲ってきた。いつもそうだ、コーヒーマの香りは眠気を覚ますのではなかったのか、そんな自問自答も功を奏すことなく瞼が落ちる。

「おはようございます」

すっかり軽くなった瞼を開くと、いつぞやに訪れた不可思議なエルドラド。空の底のような、影すらも呑み込む地。空を焼く仄暗い、それでいて暖かく揺らめく炎。静かに回る風車のような歯車。

——おはよう。相変わらず朝か昼か夜かも分からないところだねえ、ここは。

「はい。影に朝も昼も夜も、関係ないですから」

いつも遠くを眺め、映すものを吸い込むような黄金色の瞳に懐かしげな光が灯る。

「今回はどうでしょうか。前みたいにお化け屋敷に行きますか？」

以前訪れた幻想に佇むお化け屋敷。字面でも絵面でも不気味極まりない存在に足を踏み入れ、そのまま奈落へと落ちかけた記憶がフラッシュバックする。

「随分…尾を引いてるみたいですね」

——怖かったからなあ…。散策でもしよう。ゆっくり、前みたく後ろついていくから

「そこは虚勢でも隣にいて欲しいですが…離れないよう、手を」

小さくはにかみながら、力強く差し出される手。細く長いそれは心地よい冷たさを携えていた。できるだけ優しく包むように頂戴する。

——よろしくお願いいたします

「はい、行きましょう。足元、お気を付けて」



「こんにちは、おはようございます」

——怖かった…！

「よく…落ちますね」

——好きで落ちてるわけではないんだけど…

「…知ってます」

あの後、腰が引けた私を引率しながら、向こうの世界線を観光した。その顔はうかがえなかったが、後ろ姿、濡れたような漆黒の尾は、仄暗い中確かに楽しげに揺れていた。

しかし全てが目新しい私にとって、物見遊山気分になるなという方が酷な話であった。虹とも天の川とも分らないが、架け橋の麓の伝承。確かめたいと一度思うと確かめずにはいられなかった。

引率する彼女の手を引き、酔いの1歩を踏み出した途端、足元が孔となった。夢の中でも背中に冷たいものがほとばしった。目を剥き、夢の主人に助けを求めようと振り返る。

いつも以上に名残惜しそうな、困った笑顔を浮かべていた。

——悪かったよ。夢の時間、短縮してしまつて

「全くです。さあ、入りましたよ、コーヒー」

——ありがとう。…しまったな、お茶菓子を持ってくればよかった。

「お茶菓子…？」

——ああ、同期の子がね、担当と旅行に行ったらしくて。そこのお土産。クッキーとお饅頭なんだけど、完全に忘れていた。……お前らのせいだぞー？

背後に視線を投げ、咎めるように言う。いるかは分からないが、急かされた結果忘れてしまったのだから、幾分かの責任は彼らにもあるだろう。

——あ痛ア！

突然鳩尾に痛みが走る。どうやら逆鱗に触れたらしい。彼らは執拗に身体の柔らかい部分を狙って拳を突き立ててくる。最近は何から見たら狂人そのものだろうと、呑気に苦笑すら浮かべる余裕が出てきた。

この光景を横目にすっかり口を噤んでしまった部屋の主人の耳がなにか思いついたようにこちらを向く。伏し目がちな瞳が強く何かを訴えてくる。

「…では、トレーナーさんの部屋に移動しましょうか。ここで一杯、トレーナーさんの部屋で一杯、です」

——構わないけど、時間は大丈夫？

「はい、いつもより早いので…っ」

ばさりと、大きく尾がたなびく。持ち主は驚いたように目を丸くして尾を身体に巻き付ける。

確かに連中にせっつかれたため、かなり時間が残っている。なにか噛み合っている気がするが、努めて意識を持っていかないようにした。

——今日はゆっくりしようか

「…はい、「一緒にうとうと、まどろみに苛まれますよう」

——コーヒー入ったら眠れないぞ？

「大丈夫です。カフェインが効くまで30分から1時間…。飲んでから直ぐに寝ると、効き始める時間に起きられます」

——なるほど…理にかなっている…

差し出されたコーヒーは、思っていたよりもすつきりとしており、楚々とした味わいだった。カップを揺らすと底が見え隠れする。

こういったコーヒーもあるのだなあとますますの関心が湧き上がる。

ソーサーにカップを置き、一息。染み渡ったコーヒーの香りが心地よい。

向かいからもカップを置く音。同じく一息入れているのだろう。

「…夢も現も、共に歩んで頂けますか」

伏し目がちに問いかけられる。

返答は決まっていた。

——喜んで

「ふふ…では行きましょうか」

——え、もう？

「眠れなくなりますよ」

——ふむ？分かった、行こうか

パチリと、勝手に明かりが落ちる。早く行けと言うのか。  
”皆”に再度せつつかれるように部屋から押し出される。

背後でその部屋の主人は、その目に私を写していた。

「次は、貴方の夢を。共に」

## 茶請けは錠剤

「やあやあモルモット君、待ちくたびれたよ。おや、カフェも一緒かい？」

ばたむ、と有無を言わせぬ圧とともにその戸は閉じられた。

私が鍵を開けようとカバンの中をまさぐっていると、カフェが訝しげに猫のような瞳でドアノブを回したのだ。

今その視線は、はるか彼方を見つめるように、私に注がれていた。

——口が空いているぞ

「…なぜ、タキオンさんが」

——いつぞや留守中に薬品を届けに来る際、冷蔵しておかなくてはならないとの事で合鍵を渡したから、その時の

「絶対に返してもらってくださいね」

——お、おお

肯定以外の返答を圧殺せんとばかりに耳を絞り、眉間に力が入った。

言うが早いか、彼女はドアノブを引き、件の女史と相見える。二枚貝と海鳥を眺める漁夫のように不躰な視線を投げってくる。

「…タキオンさん、何故ここに」

「愚問だね、カフェ。私がここにいることが答えであると何度言えればいいんだい？」

「トレーナーさんを執拗に試薬の被検体にするのをやめてください、と常々答えています。貴女こそいい加減理解してください」

「ふうん、それもそうだが如何せん彼が実験の被検体になることに好意的でねえ。私が執着してしまうのは仕方のないことではないかね？」

キツ、と私に向かって一際鋭いクナイが投じられた。以前は度々投じられることに狼狽の様を晒していた私だが、純粹な狂気に当てられ被検体を受け入れること数百。今では悪びれもせず、一身に的になることができるようになった。

「っ、その顔が気に食わないと何度言えば…。貴方はタキオンさんに影響され過ぎです。これから私のいる範疇でやり取りをしてください。常識を再履修させてあげます」

「はっはっは！カフェに常識を教えこまれるとは、君もいよいよ晴れて魑魅魍魎の一員になってところかい？」

まあそう目くじらを立てるなよカフェ。私とトレーナー君を必要以上に隔離すると私の矛先は君だよ？」

「…であれば私と同じ空間にいるくらいなら問題ないでしょう。それにその隔離だのなんだのといった言葉、私を除け者にトレーナーさんに薬品実験している貴女へ熨斗つけて返してあげます」

「くくっ、変に束縛すると男つてのはするりと逃げてしまうそうだよ？それに、今まで君たちが”2人きり”で語らいの時間を設けていたのと同じく、私とトレーナー君の”2人”で話さなくてはならないことだってもちろんあるのさ、どうだい、んん？」

「……………合鍵は必要ないですよ。返してください」

「どの事だよ、トレーナー君。私は返した方がいいかい？」

二対の眼差しが私を射抜く。窘めるように、確かめるように。答えは決まっている。だが一名の反感を買うことは間違いない。二度も念を押して忠告を受けた傍ら、すんなりと言葉にするのは躊躇われた。

まあこの質問に対して要する時間の一分一秒が、彼女に対する罪の大きさを比例して大きくさせるのだが、と内心苦笑しながらどこまでもねじくれた自身の性質を嘲る。

——いや、いいよ。そのままです。私はなんだかんだ楽しみにしている節があるし

「…っ」

「…ふうんっ？」

——まあそんなことはないんだ。私たちはコーヒーを飲みに戻ったんだよ。よかつたらタキオンもどうだ？

「…コーヒーいい??」

まだ飲んでもないのにたちまちタキオンの表情が曇っていく。紅茶党の連中とコーヒー党の連中は仲が悪いのだろうか。私はどちらも美味しくいただけなのだが。銘柄などまで追求することが出来るほど舌が良い訳では無いから、嗜む程度になる。

——しかしカフェ、うちにはインスタントしかないぞ

「構いません…:~:ということなのでタキオンさん、紅茶は無いので」

「君も言うようになったねえ…カフェ。だがしかし、この部屋も徐々に私の研究スペースになりつつある。これが何を示すかわかるかい？つまりここも私の居住区のひとつとなりつつあることと同義な  
さ！」

それを許した覚えはないが、受け入れるこちらも悪いのだろう。既に私の部屋の3分の1は彼女の実験器具が所狭しと並んでいる。

「…はあ、行きましようトレーナーさん。貴方が私のコーヒーを入れる姿を見つめるように、私も貴方が淹れる姿を見てみたいです」

背中を控えめに押されてこじんまりとした台所へと向かわされる。なされるがままに歩を進めると、そのさらに後ろから聞こえるか聞こえないかという声をかけられた。

「私とカフェの影響か、それとも潜在的なものか…ふうん、本質が歪になってきている」

どこか冷ややかな声音はいやに耳朵に残った。

台所には1人でたどり着いた。

——入ったよ



「ありがとうございます」

「むう、私には茶葉と熱いお湯…なんだね！この扱いの差は！」

ダンダンと急遽あしらったパソコンデスクを叩きながら抗議の声  
が上がる。叩かれる都度に我々の茶器が宙に浮く。ウマ娘の腕力を  
忘れたのか、案外容赦がない。

——そう言われても

私は紅茶の淹れ方を知らない。故に任せの方が良いと単純明快に  
判断しただけである。そのポイントスタントコーヒーは素晴らしい。  
分量を変えるだけで味を濃くすることも薄くすることも可能で機転  
が利く。

「準備してもらって、文句言わない」

「ぬう…」

——悪いな

眉頭を下げて粘っこい視線を注がれることに辟易するが、担当間で  
の明確な鼻肩は確かに褒められたことでは無いので甘んじて受け入  
れる。

「んん？…おお、そうか。」

私を手ずから手ほどきをしてやればいいのか。そうすれば長い目  
で見た時、研究合間に入れる手間が減る！実に合理的じゃないか！

「ダメですよ、これ以上甘やかすのは」

最もな指摘だ。ただでさえ薬漬けになっているのに、それを助長させ、更なる投薬を行われるならば御免被りたい。

だが個人的に研究合間に紅茶を入れることは吝かではない。なんなら寧ろ――

――いや、ここは手ほどきを受けておこう

「…?!」

「ほう！良い気概だねえ…私と過ごすうちに随分と献身的に、いや、盲目的になったのか？いや、有難う！そう言ってくれと非常に助かるよ！」

――研究合間に無断で研究材料にされることが防げるからな。タキオンの世話は自己保身に繋がる

「……ああ、なるほど」

そう、問題を垂れ流す蛇口に悪戦苦闘するのなら、その蛇口をもとより閉めてしまえば良いのだ。

全てこちらの管理下に置く。そうすれば自然とクレイジーな実験からは遠ざかることが出来る。

「……………もしや研究が進んでいると盲目的になっていたのは私だったと……………？果てには知らぬ間に研究の幅を狭められている…？」

――合理性を追求するが結果、前提条件に歪みが生じていることに気づかない。研究者の風上にも置けないな。

それはそうとタキオンの世話は特に苦でもないからな、何時でも申しつけるといい。期待に応えられるよう、粉骨碎身でやらせてもらう

「…トレーナー君、今私は君の事が心底憎たらしいよ」

「散々甘やかしてもらって結果ドツボに嵌っただけなのに酷い言い様ですね。」

トレーナーさん、本格的とは言えませんが私もコーヒーの淹れ方をお伝えしたいです」

——カフェの手ほどきか、いいね。喜んで

「…ふふ、やった」

「おいコラそこ！私を除け者にするなっ、ええいトレーナー君！紅茶の淹れ方を教えてやる！私のためだけに紅茶を入れろ！そうしなければ私はこれからの一切のレースで『ポツンと一人、アグネスタキオン』と呼ばれ続けるぞ！いいのかー?!」

——良くない。

「とういか何だ！君は私の研究にいつも乗り気ではなかったのか！楽しかったのは私だけか!?!」

らしくもない、随分な剣幕で捲し立ててくる。そんなに他人の思いどおりになっているのが悔しいのか。

そして研究に関してはいつも乗り気だ。副作用で身体の一部が光り輝いたり、体臭が劇物から甘味料までピンキリの変化をするという意味不明なハンデを負うことを加味しなければ、実験も、そこから得られる答えも非常に興味深い。

一時股間が煌々と光り輝いた件に関しては死ぬまで許さないが。

——そんなわけないだろ。乗り気でなければ毎日のように試験管を1ダース空にするような頭おかしい真似するわけない。この体が

思い出したかのように輝き出す程に至らしめたんだ。むしろこの落  
とし前をつけてもらいうまで逃さん

『1ダース…?!』と戦慄を覚え、カップ危うく落としかけるカフエを傍  
に、『まさか研究の縮小はブラフでこつちが本命…?!』と戦慄を覚えて  
いるらしいアグネスタキオン。

ここまで身体改造を施されたのだ。君の獲得賞金で惰性を貪って  
も過度なバチは当たるまいよ。

「…あの、タキオンさんはほんとに何しに来たんですか？」

「おお、そうだった。トレーナー君へのお使いを頼まれてね、ええつと  
どこにしまったかな」

——お使い？ 私にか？ 実家からの贈り物などはたづなさんがいつ  
も持つてきてくれていたのに、なぜ君が？

懐をまさぐる彼女はその手を止め、いつになく剣呑な灯りを宿した  
瞳で見つめてくる。おや、と思うと同時にその瞳は再び二対となつ  
た。

「…なんだい？ 君は担当よりもあの人の身して葉緑体を欲しいがまま  
にする女性を好むというのか？」

——言い方ももう少しどうにかならんか？

「トレーナーさん…」

——君もか！

そもそもトレセンに贈り物をする際、検閲が入る。その次点で宛先



「次は話を通します」

——頼むよ

「…」

いたく反省している様子のタキオンに、宇宙を見るカフェ。彼女らを眺めながら冷めて酸味の増したコーヒーを啜る。  
眠気は襲ってこない。

## 芦毛の怪物がやってくる

火急体育館裏に来て欲しい、そういった旨の連絡を受け、慌てて現場に急行する。基本ろくでもないことが多いが、目を離すと不摂生に殺されかけているから袖にするわけにもいかない。

なぜ体育館裏なのか、この点については努めて考えないようにする。

見渡せば何ら変哲のない、野花が開く落ち着いた場所だ。白衣のウマ娘が倒れてさえ居なければ。

——タキオン！

「やあ…来てくれたかいトレーナー君。見ての通り、食事をとるのをわすれていてね…。このザマで悪いが、頼まれてくれないか」

案の定不摂生が祟り、身動きが取れなくなっていた。また今回は随分と酷い。幽鬼のような血色に、カサついた唇。髪も肌も荒れている。

女を捨てたのかと問いたくなるが、以前女の何たるかを力説された為、口を噤む。ただそれは一般男性に治験の行われていない謎の薬品を投薬することや、三原色のビーカーをおもむろに注ぐことではないと思う。

——いつから寝てないんだ、全く…

風通しの良い場所まで連れて行き、横たわせる。年頃の娘とはいえ、筋肉が常人のそれよりも発達しているため、持ち上げるのに苦労はしないが、重い。脱力しきっているのもそれまた助長する。

——少し待っててくれ

彼女たちほどではないが、これでもトレーナーをやってる身だ。マシなフォームで自室へ駆ける。

いつもタキオンが摂取していた世紀末食をカプセル化した物が残っていたはずだ。世紀の大発見だ！などとほざいていたが、今は緊急事態。なりふり構ってられない。

乱暴に玄関口を開け放ち、隅々まで掃除の行き届いたフローリングを土足で駆ける。

リビングの扉を開けようと手を伸ばした時、中でけたたましく物音がなった。

(……?)

「あっ……」

——カフェ？なんでここに……

「えつと……尋ねてきたとき、慌ただしく出かけられたので……」

——またタキオンが倒れたから急いでるんだ。小一時間かかると思うけど待てるなら待ってもらっていい？話あるなら聞くからさ

「……またタキオンさんは」

口では傍迷惑だと言わんばかりに陰気だが、耳と尾はそわそわと落ち着きがない。

着いてきてもらう分にはありがたい話だし、ウマ娘1人増えれば文殊の知恵だって力技で超えられる。ただその前にやるべきことが出来た。



「あの、私も」

——もちろん、その前に髪どうにかしようか

この部屋で落ち着いてくれたのはとても嬉しいことだが、随分と寝癖がついてしまっている。横になったのだろう、漆で仕上げられたような黒髪にいつもと違う意味で目を奪われる。

「っ!？」

一陣の風が、洗面所にたなびいた

自室での一悶着の後、カフェに現場の位置を教え、錠剤と水を持たせて先に行かせた。その足跡を踏むように後を追う。いつぞやこんなことがあったような気がする。

何故かわかるカフェの轍を辿っていると、視界の端にとてつもない存在感を捉えた。

「トレーナーか？」

前方もこちらに気づいたらしく、迷子が見つかった時のような相貌を晒す。

——…?!

「ぐう…トレーナー君めえ…なぜよりもよって”コレ”を持ってこさせるんだ…」

「タキオンさん…フツ、その…輝いてます…フフ…」

「ええいうるさいいうるさい！副作用に関しては毎度の如く説明していただいたにこの所業っ！覚えてろよモルモット君！」

「冗談抜きで死にかけていたのに、言うに事欠いてそれですか…」

三下のように情けない恨みつらみを零し、ネオンに輝く彼女を前に笑いが込み上げてくる。いつもは面倒を被っている身からすると痛快無比だなあ、なんて。

「…カフェ、その愉悦の表情をそろそろ引っ込めないか。まるで鏡を見ているようだ」

失礼な。貴女の姿見など願い下げだと思わず口走りそうになったが咄嗟の理性で封じ込める。

とりあえず残った水のありったけを注ぎ込むとしよう。

「おい、なんだその鍛えられた鋼のような意思をはらんだ瞳は。ちよっと待ってくれ、カフェ？気に触ったなら謝る！謝るからその手をつ…むぐっ?!」

虚ろな目でペットボトルの中の水が吸い込まれていく様子を眺め

る。350mしか入っておらず、その残りのため、大した危険はないだろう。ごぼごぼ。

一方タキオンの方はウマ娘の膂力によって迸る鉄砲水に目に涙を浮かべている。これでも一応名家のウマ娘、はしたなくごぼすなんて真似は許されない。ひたすら喉を鳴らすことだけを考える。

「この辺か、トレーナー」

幾らウマ娘であつても死ぬぞとそれは苛烈な熱を帯びた気迫とともに首根っこ引つ捕まえようと軸足で地面を踏み抜いた時、聞き覚えのある声が耳をそちらへ向けた。

そこには芦毛のたなびくウマ娘が、新天地に目を白黒させるようにキョロキョロ、ウロウロと探し物をしている。

その腕にトレーナー君をしまい込んで

「トレーナーさん…?」

——見ないで

カフェが怪訝にトレーナー君を呼ぶ。だがトレーナー君は両手で顔を隠し、小刻みに震えている。多分恥も外聞もない状況に顔をあげられないのだろう。男性には特有のプライドがあると聞く。それについて研究させてくれと色々提案させてもらったがことごとくを却下された記憶がある。

「おお、君が今のトレーナーの担当か。」

その状況を知ってか知らずか、呑気に受け答えをする彼女、オグリキャップ。知っているとも。地方から旗を揚げ、トレセン学園の門を

叩いた暁には数多の功績を積み上げたこと。…その横に彼がいたことも。

「オグリキャップ君じゃないか：帰省は済ませたのかい」

「ああ。懐かしい匂いがして、とても落ち着いたよ。しっかりと休むことも出来たし、これでまた走れる」

「ふむ…：つきり戻ってこないものかと思っていたよ」

「そんなつ、私はまだ走るぞ!？」

「それにしても長い帰省だったじゃないか。もうそちらに腰を据えて一線を退くとまで言われているが」

「まさかそんなわけないだろう。もちろん地元だって大切だが」

狼狽えたり憤慨したりと忙しないなど現実逃避しながら腕の中から眺めていると、突然慈しむような目を向けられる。

何さ、スーパークリークとそつくりの目をしてるぞ今。君はそういうタイプではないだろう。

何を察したか、カフェの目が細くなる。

「…トレーナーさんと走りに」

「ああ。まだ足りないからな、君とのレースも勝利も」

静かに、だが辺りを焦がさんばかりの闘志は、厄介な2人の欲を掻き立てた。

2人の異質な熱感をひしひしと感じる。こればかりは腕の中の温もりがとても喜ばしかった。

——と言っても調整からだ。休暇前の身体に染み付いた感覚と現  
状にズレがないか、綿密にな

「うん、しっかりと頼む」

曇りひとつない微笑みがさらなる安寧をもたらし、さらなる佳境を  
呼ぶことになった。

凄まじい熱線を放ってくる2名のウマ娘。

情報の一切を悟らせない金色をする一対の目、そして狂気に満ちる  
緋色の目。二対の眼差しが我々を射抜き続ける。正直震えが止まら  
ない。奥歯は鳴るし、鳥肌も立つ。冷や汗で背中には既に湿地帯だ。だ  
が一方オグリはそんな双眸を受けてもどこ吹く風。果てには『なんだ  
か熱い視線を感じるんだが…』とそわそわする始末。お前はもう少し  
空気を読めるようになれ。

——とりあえず下ろそうか

「もう少しこうさせてくれ。…うん、この匂いもとても落ち着く」

——さつきちよつと走ったから汗臭いだろう

「なにつ、すん…」

眉目秀麗なおもてが近づき、鼻を鳴らす。

刹那、風景が一転。目を白黒して幾ばく、たちまちカフェによって  
後ろから羽織りのように抱きとめられているらしい。普段穏やかな  
彼女が恐ろしい瞬歩を見せた。

——カフェエさん？

「少し静かにしてください」

あっはい

後ろから羽交い締めにされているため、顔色をうかがうことは出来ないが、どうやら相当ご立腹らしい。……地面を蹴る音が聞こえる。

「カフェだったか、その、まだ嗅げてない……」

「あげません……」

「そんなんっ」

耳を垂れ、目じりを下げ、どうやらそこまで魅力的だったらしい。こちらからすればご勘弁願いたいところだが、オグリキャップは我慢することに関して根性を発揮することは無い。かの皇帝の喉元まで迫る末脚と敏捷性、瞬間火力の切っ先が我々に向いている。

目前では萎びた”姿”だが、気配が尋常ではない。

「むむ、仕方がないか」

それは諦めの嘆息ではない。決意の一呼吸だ。

私とカフェ、2人して息を呑む。危害は加われないと分かっている。でも、轟雷のような足を蹴る音に肌が粟立つ。これは皇帝でも冷や汗のひとつはかくだろうな。

——ちよっ待

「まあちよっ待ちたまえよオグリキャップ君」

「っ?!」

まさに青天の霹靂、首元にゆるりと突きつけられた針先に、いざ鎌倉と地を割り、踏み込んだ力を上へ逃がす。結果鋭角に踏み抜かれるはずの地面が垂直に彼女の火力を受け、爆発した。

当の犯人は尾を逆立て、跳ね上がった。

「…ふうん、この瞬間火力、えげつないねえ…。何をどうしたら文字通り地面を爆破できるのか…」

もうすっかり良くなったのか、研究者としての血の騒ぎを抑えきれない様子で砕かれた地面を手頃な枝でつつく。

毎度レースでもダートでもお構い無しに地面を抉り抜く脚力には度肝を抜かれ続けたが、実際目前にすると戦慄を覚える。

「タキオンさん…それはさすがに危ないです…刺さったらどうするんですか」

「仕方ないだろう？結果オーライだよ。それに刺さったら刺さったで」

「良くないです」

「まあとにかくだ。彼は今や君だけのトレーナーではないのだよ。いけしやあしやあと私のモルモット君の体臭なり体重なりを計測することは許さない」

「2秒で矛盾するのやめてください。貴女だけのトレーナーさんでもないです」

前から担当しているオグリキャップを紹介するタイミングを逃した結果、小競り合いが起きてしまった。

多分オグリキャップのこと自体は知っていただろう。欲しいがままにしてきた星の数々。マイル走から中距離、長距離、ダートに至るまでに名を轟かせた。

だが私はメディアから絶対の逃亡者と呼ばれるほどに雲隠れを決め込んでいる。不誠実だの臆病者だのと巷では評判だ。トレーニング内容なども公開したことがないため、勝てる理由はひとえに彼女の才能であるとされ、以前は才能のヒモと呼ばれていた。

オグリが満を持してURAFアインナルで皇帝と鎬を削った際、絶対に迫る才能を磨いたと言われたが、私に付いていたレットルにより新たな担当が就くのにかなりの時間を要した。その間にもたづなさんからのやつかみは耳にタコができるくらいにいただいた。早く会見を開けと。

そう、担当が着くと時同じくしてオグリが帰省したのだ。なんの前触れもなく。

それに食いつくはもちろん記者の方々である。その対応も適当にいなしていたため、尾ひれ背びれが付き、担当解除か、などと噂された。

私としてはたまには実家帰れば？というノリで彼女に提案したただけで、二つ返事でじゃあ帰るわと帰ったからやっぱ帰りたかったんだろうと良いことをした気分にはひたっていた。オグリはオグリで私を何かにつけて地元へ連れていこうとした。これから仕事が増えるのでダメですと却下したけど。

私がこういう態度をとるからオグリキャップの評判が落ちると言われることも少なくない。実際トレーナー排斥派と擁護派といった派閥のようなものが水面下で組まれている。

そういった面でも私は表に立つべきだろう。だがそうするわけにはいかないやんごとなき事情があるのだ。もちろん今更登壇するのもゴメンだという下らないプライドもあるけれど。

”転ばぬ先の杖”らしい。私は。



随分と買われたものだ。本当に厄介な者に唾をつけられた。

「しかしてトレーナー君。3人となるとチームも検討するのかい？」

感慨にふけっていると、恨みつらみを込めた視線を背に受けながら嘲るように問うてきた。流石のオグリも腹に据えかねたらしい。

そしてその質問に対する答えは考えるまでもない。

——いや、チームは組まない

「ふうん？して、その心は？チームを組んだ方が軍資金なり練習場なり融通が効くというのに」

「チームはよくわからないですが、聞く限りいい事づくめでは…？」

——確かにメリツトは大きい。申し訳ないが私の都合だ。記者団が詰め寄るだろう。私とオグリだけならまだしも、君たちに弊害が及ぶ。それだけは絶対にダメだ

「くくつ、厄介な立ち位置にいるからねえ」

「…？」

——何にせよチームは組まない。不都合かけるが許してくれ。まあ暫くオグリは調整だし、君たち2人を見る時間の方が長いしね。さて、少し早いけどご飯時だし、どこか食べに行こうか

そういった今後の話はまた逃え向きな場所で確と膝を突合せて話すべきで、こんな青い香り漂う場所でするような話でもなかろう。

それよりも彼女たちの懇親を深めるべく、食事にでも連れていく方

が先決だろう。現に今でも空気が重い。

そう思つて1歩歩みを進めようと足を上げるが、身体が着いてこない。まだ捕まっている。カフェさん？

「おいしいオグリ君、私に執心するのは結構だが、トレーナー君のことはいいのかね？」

「はっ、そうだ！トレーナー！」

「すんすん…あつ、あげません…」

「トレーナー！」

「カフェ！そこまでは許してない！」

## 女帝が来る

「ほお、会長からの頼み事を袖にして放蕩とはな」

怜悯な瞳に意味ありげなほほ笑みを浮かべ、肩を掴まれる。…しまった厄介な奴に捕まったぞ。幸い3人は店に入ってしまったって私を待っている。

ここは柳に風と受け流し、厄介を増やさないよう立ち回らなくてはならない。

——いやなに、いつも懇意にさせてもらってる札にだな

「にしては店内が騒がしいな。まだ開店前だと言うのに」

さすがにキレル奴だ。初めから見ていたのかは定かではないが、ある程度アタリをつけてきたといったところだろう。

ここは素直に白状するしかない。既に白日の下にあるのなら保身に走る方が面倒なことになる。

——担当を連れてきたからね、これからも顔を合わせることになるだろうし

「これから勝ち星を量産するど？」

——まだまだ序の口だけど、勝てるだろうね

鼻根目抜きにしてもあの二人は別格だ。

光速を冠する名を持つだけあって、他のウマ娘たちとは隔絶した脚を持つアグネスタキオンに、”おともだち”を追うマンハツタンカ

フエの異様なまでの圧力。

尖っているが故にどのレースに現れても対策を必須とされる。しかしそう思ったが最後、本人たちは解っているかわからないが——解っていたらそれこそ恐ろしいが——彼女たちの領域で走らなくてはならなくなる。

この世代の娘たちが少し可哀想に思える。

「ほお、まるで勝つことがオマケのように聞こえるが」

剣呑な光を灯した瞳から目を逸らしたくなるが、まああながち間違っていないし、否定してもこの娘は看破してくる。レースを手段としている以上、純粋に勝利を目指している娘たちに申し訳が立たない。

——まあね、彼女らの本懐はそこじゃない。さらに奥底の本能にまで至るとどうかかわからないけど

「たわけ、怪物を見てきて未だにわからんのか」

呆れたように口元を歪めながら言う。何を思い返しているのか、きまりの悪そうに尾を揺らす。

彼女らの走る意味に関しては不明瞭なところが多い。カフェに関しては我々には見えないオトモダチを追い、並び立つことらしいが、現段階では個人的にはどう手をつけるべきか分からない。

タキオンなんて自分や他者を研究材料に見ている節がある。

2人ともあまり真意を話さない、というか話されても目下見当もつかないものだから、これまた手探りで自分なりに噛み砕いてやるしかない。

——それじゃ、みんな待ってるから

無駄話に花を咲かせるのも悪くないが、如何せん先約がある。待た

せている以上、突発的なことは後回しにしたい。

だが、そうはさせまいと私の手首を捕らえ、鋭く見据えられる。

「私が用もなく貴様に話しかけると思っているのか？」

——だとしたらくどい。君との時間も悪くないが、優先すべきは君じゃない

他のトレーナー諸兄諸姉はこの”女帝”エアグルーヴに対して物腰柔らかに赤べこのように首を振っているが、彼女に対してそこまで気を張る必要はない。ただ生徒会副会長で、皇帝の右腕であるだけだ。

しかし皇帝が自ら仕留めに来ず、エアグルーヴがわざわざ来てくれる現状の方がまだ平和だ。そういう意味ではこの軽い頭蓋、いくらでも振り回して見せよう。

「ふん、貴様は私の右腕にする。そして会長の下に就かせると言っている。それだけじゃない。ブライアンの奴も貴様の暇に鼻を利かせているぞ」

——やなこった。あんなイロモノ共の下につかなければならないほど満身創痍ではないし

私は既に行きたいところがあるのさ。生徒会なんて処刑台仕立て人すらおったまげるようなところで油を売っている暇なぞないのだ。

「なっ?!言うに事欠いて貴様っ!我々をイロモノだと?!」

——女帝に怪物、それを従える皇帝。オマケに次世代の帝王にスーパーカーと来た。どういう運命でサミットを開いたか知らないけど、誰が好き好んで近づきたがるんだ

あの重厚な扉を開けた先にある心臓が縮み上がるような空間。扉を開ければ全員の耳がこちらを向き、各々の双眸が私を射貫く。

特にシンボリドルフ。

あの全力で支配するという仁王のような覇気は一般ピーポーの私には受けきれぬ。

二度と行かねえ

「我々は普通に生徒会の仕事をこなしているだけだ！他の2人とは茶を共にすすめるような間柄で…」

「我々も同じだよ、エアグルーヴ君。紅茶を飲み、研究にその身を焦がすことこそ我々の使命であり、トレーナー君の運命なのさ。ケミカルに輝くのはご愛嬌だよ」

愉しげな色を前面に押し出しながら掴まれた腕の反対側の肩にしなだれ掛かってくる。胡乱気な瞳とは裏腹に随分と強い力で反対側へ引き込まれる。

「アグネスタキオン…」

——タキオン、2人は？

「カフェがオグリキャップ君をかううじで諫めている。君も早く来たまえ。個室が唾液で水没する前に」

先に食べてていいよと何度も言っているが、私が同席する場合、頑として私が席に座るまで出された食事に手をつけない。その姿があまりに可哀想で申し訳なくなる。

——ああ、そりやいけないな。急がないと。  
それじゃ、エアグルーヴ。またね

「話は終わっていない、が。本当に私との時間を悪くはないと思うのならたまには生徒会室に來い。貴様とは膝を突き合わせて話したいことがあるからな」

強い眼力の中に、どこか縋るような光を感じた。

いよいよ執心される意味がわからない。確かにオグリキャップを育成してそれなりに名は売れた。それが生徒会の目に付いたところまでは良い。だが何故抱きこもうとするのか。その理由がまったく見当もつかない。

私とオグリはただレースを楽しんだだけだと言うのに。

「トレーナー君はこれから新たに問題児2名引っさげることになるからねえ。さてさてそんな暇ができるかどうか」

——まあ私がそちらに向かうことはまずないだろう。来るなら1人で私たちのところにおいて

百歩譲ってここが限界だ。できることならただの生徒として訪れて欲しい。そして年相応に振舞って欲しい。シンボリルドルフにじゃれつく彼女ほどとまでは言わないが、力の塊である、生徒会という肩書きを下ろしてから来て欲しいものだ。

一切に願ひ、踵を返す。

あのURAFファイナル決勝。会長が優勝した大会。”皇帝”シンボルドルフ1強と予測され、それに呼応するように会長も”出来上がって”いた。絶対を誇示する威風堂堂とした佇まいに、あの大会の空間そのものを手中に落とし込んだ。

並み居る屈強な傑物たちを選別するようなあの一瞬。瞬きを忘れ、全身が総毛立つ錯覚を覚えた。

【敗北】を直感した瞬間だったのかもしれない。

状態もすこぶるよく、トレーナーの手腕も初期に比べれば手放しで喜べるほどだ。万全だった。自分たちの持てる磐石がその一瞥によって崩壊せしめられた。

これが皇帝。絶対を背負い、ウマ娘たちを牽引する者の姿は、どこまでも美しく、頑強で、恐ろしかった。

そして、理解させられる。私は”皇帝”シンボルドルフを尊敬している。

だが、蓋を開けてみれば、

”絶対”とは、

こうも容易く揺さぶられる。

ハナ差で勝利。あの瞬間は初代優勝者より、彗星のように尾を引く芦毛の方が印象に残っていると言う観客も少なくない。

「貴様が、オグリキャップが、会長を振り向かせた。私達では成しえなかった」

小さな拳を握りしめ、瞑目する姿は、いつもより随分と小さく見えた。



「だからこそ、私たちには貴様が必要だ。私たちの本能を暴いて見せろ」

「トレーナー、酷いぞ」

開口一番コレである。

そわそわと耳も尻尾もせわしなくはためき、今か今かと開幕のゴングを待っている。煮える鍋の前に待ちきれないといった様子。

右手に箸を、左手にはお椀を持って準備の方は万端だ。

「トレーナーさん…あの子、オグリさんのお腹の音で逃げてしまいました…」

——ええ…、そりや申し訳ないなあ。

長い付き合いだけど、オグリの腹の虫だけは教育出来なかったからなあ

すすすと私の座るスペースを空けてくれる。折角だからとそちらへ足を向けるが、当然待ったがかかる。

「え、トレーナー、私の調整をするのではなかったのか？」

「調整…？」

——そうだった。すまんカフェ、気持ちだけありがたくもらうよ

「…どうしてですか？」

その疑問は尤もである。調整と言われてまさか食事のあれこれにまで言及されるのかと言ったところだろう。

言及せねばなるまい。オグリキャップだもの。

放っておけば際限なく食い続ける。そして調整の2文字が背景にあるとは思えない姿になる。

あれだけ食いまくって勝てるこの娘はまあイカれているのだろう。

「おいトレーナー君、もっと詰めたまえ。私が座れないだろう」

——カフェ、席を空けてやってくれ。タキオンを壁側に

「はい、わかりました。…どうぞ」

「ええー、あまりに非合理的じゃないか。私の向かいはそんなに嫌かい？」

渋々といった様子で私の対角線上に鎮座する。何はともあれ理想の席順になった。

面倒ではあったが、タキオンを壁側にした理由、それは——

——カフェ、身体検査

「はっ」

「なにい?!」

有無を言わさず、タキオンのふところやポケットをまさぐる。そし

たら試験管がごろごろと出てくるでてる。

タキオンも『やめたまえカフェー!』と抗っては見せるが、もはやフローチャート化したのか、巧みな身体さばきで無力化してみせるカフェー。

内蔵されていた危険物は3分とかからず剥き終わった。

「はあーあ、折角健康体そのもののヒトとウマ娘を使えると思ったんだがねえ」

「食事に変な事しないでください」

——全くだ。薬とはいえ毒を盛るように忍ばされるのは私も好くところじゃない

「はいはい、悪かったよ。いい加減ただごう、もう白菜がクタクタだ」

「……………」

食前に話が少し盛り上がってしまった結果、うつろな瞳で口端からよだれが垂れることにすら気づかないオグリ。

また悪いことしてしまった。

——食べよう。今日はたくさんな

「いただきましゅ」

腕によそった先から消えていく。マジックと言っても信じてもらえる速さだ。早めに追加注文をし、美味しそうに食べる彼女を見ると、今日からの調整は不可能だと断定できる。底なしの食欲にはほとんど辟易させられるが、幸せを体現するかのよう咀嚼する姿はどこ

までも愛らしい。

「…トレーナーさんも、食べてくださいね」

ことり、と私の前に具材をよそった椀が置かれる。具材を1種類ずつ盛られたお椀から、最上の気遣いが見える。おっと湯気で前が見えない！

曇ったメガネにカフェが微笑んだ気がする。

あと楽しそうに笑う声も聞こえた。

——ありがとうございます、カフェ。カフェもしっかり食べるんだぞ

「はい…美味しいです」

ここは商店街の一角。その最奥の個室。

1人の食事もいいが、こうやって鍋を囲むのもいい。

## 黎明期

メイクデビューを控え、2人のトレーニングに励む毎日。同時期にデビューするということもあり、2人を並走させることでレース勘を養うことが出来るという利点がある。それをふんだんに利用する。また、本番のレースに勘を近づけるため、少し趣向を凝らす。

1人2200mを走らせ、半分の1100mを超えたところでもう1人を檻から放つ。

タキオンの場合、後方からその影を踏まんと猛追するフロントムが。

カフェの場合、前方に狂喜に咽ぶサイコパスが。たまにおなかいっぱいのおグリが差しに来る。

全快の状態で解き放たれるものだから、双方吃驚し、ペースを乱される。

それはいい表情をするのだ。最初に無断でタキオンで試したが、研究で得られた治験を試している最中にその尾を刈り取らんと異質な圧力を携えながらカフェが迫ってくる。結果は上々と恍惚の表情から一転、その両目を剥いて追い立てられるようにギアを上げた。

もちろんネチネチと怒られたが、それまで治験によつて伸ばしていた記録が目でもないというように大幅に更新された。

『火事場の馬鹿力という奴か…。無我夢中で走つてフォームも何も無かったのに？』

速度に頭打ちが見られていたのは確かだが、まさかこれに対する答えが根性論とはね：くくつ、フアジー過ぎるよ全く。精神が肉体を超越したということか』

と感想を漏らす。

このトレーニングの可能性についてさらなる改良を加えることも検討するらしい。

カフェの場合、オトモダチとやらに番外戦術とも言える形で並ぶタキオンとそれを支持した私に思うところあるようだが、鬼気迫る迫力を持ってタキオンに迫る。だがそもそも勝てることはハンディ

キヤップ上ありえないのでその迫力もいくらか霞んで見える。タキオンもタキオンで全快の状態で走る中、ちらちらと後方を確認し、凶太くもカフエの状態を観察している。その見上げた向上心には毎度舌を巻く。

他のトレーナーがやらないようなトレーニングを織り交ぜ、トレーニングの幅を広げることで飽きを来させないように拘った。

まあといっても私の存在が必要か疑問に思う時もある。

カフエは夕暮れ時にふと思いついたように、『あの子が呼んでるの：行つてきてもいいですか』とトラックに戻り、トレーニング時には見せない楽しそうな表情でターフを駆ける。その様子はどこかズレた感覚を覚えさせられるが、それでも彼女らは確かな伸びを見せた。

タキオンはそもそもトレーニングに来ない。研究があるから。今回の私が勝手に催した試験的なレース形式はたまたま功を奏してタキオンの研究を超える成果を見せたが、そもそも彼女の研究の結果から得られる実力は私なしでも得ることの出来るもので、小さいながらも実を結ぶことが多い。

嗚呼、私は担当に恵まれている。

故に自分の実力が彼女たちの才能の全容を理解するまでに至っていない。

由々しき事態だ。オグリキヤップの時といい、私の存在価値がほとんどない。こんな宙ぶらりんな人材を何故生徒会は欲しがるかよく分からないが、先輩トレーナーや同期たちに後ろ指を刺される毎日に辟易としているのも事実。何とか私個人の価値を上げなくてはならない。

「で？..話はそれだけか？」

——はい。今更、というか以前より意識していたのですが、どうにも彼女たちの横に立てていない気がするのです。的確な指示が出来るために必要な知識など、先人の知恵として不躰を承知で頂きたいの

です

シックな落ち着いた内装に、牧歌的な、叙情的なジャズミュージックが心を酔わせる。いわゆる”大人のバー”で男2人、神妙な面持ちで言葉を交わす。一人の男が懺悔するように自らのふがいなさを恥じ、もう片方が呆れたように口元をゆがめる。

「お前、それオグリキャップに話したりしないのか」

——ええ、彼女の栄光に影を落とす訳には行かないですから

泰然自若にそういうのける後輩トレーナーにほとほと呆れながら、まだまだ青いなどどこか安堵の気持ち湧いてくる。

【皇帝】とあそこまで鎬を削り、観衆を湧かせたのは彼女だけの実力では有り得ない。皇帝に迫るには才能だけでは絶対的に足りない。それが届きかけた。いや、1度届いたのだ。そこに何かしらのフアクターがあつて当然だ。それを自分に当てはめないのは何故か、自己肯定感の低さに苦虫を噛み潰したような表情が自覚できる。

彼女を伸ばしたのはお前のトレーナーとしての才能だと、粒揃いのトレセン学園の中でも頭一つ抜け出した類まれなる才能だと言いたい。自分もその中の1枚の羽と自覚してはいるが、それでも隣の芝は青い。誰もが喉から手が出るほど欲しい才能だ。

「そうだな。話せばお前タダじゃすまねえもんな」

——ええ、”オグリキャップの威光を借りてまた将来有望な才能を引き込む”、と雑誌に掲載されますね

才能を肩に着てふんぞり返る連中は分かりやすく嫌悪感を募らせられるが、才能を無いものとして自身の人間性を卑下するギフトेटドに対しては暗黒の感情が湧いてくるのは何故だろうか。

言いようのない感情に身を任せ、凝り固まった後輩の頭頂に拳を振り下ろした。

男は後輩のどこか反抗的な目を、そしてその奥に潜むナニカを垣間見、背筋に伝うものを感じた。とんでもないことをしでかす、そんな予感をひしひしと感じさせる。

「お前は自分のことに執着しすぎだ。もっと周りを見る。余裕を持って」

——周り：見ているはずですが

「俯瞰しろ俯瞰。生憎俺たちを取り巻く環境つっ—のは俺たちが自己中に思い描くどおりになってくれるほど優しくないぜ」

——自分は、独り善がりだったと

「独り善がりて怪物とトウインクルシリーズを走り抜いたってのか？敗北を重ねたヤツらはそれを聞いてどう思うだろうな」

仄暗い水の底のような瞳が僅かに揺れた。

自分にも経験があるといえはあるが、ここまで独善的ではなかった。自分が担当に釣り合わない故に担当の才を読みきろうとする完璧主義は高慢ちきであり、2人で二人三脚するトレーナーと担当の関係は持ちつ持たれつのものであるべきだ。だがコイツはそれを顔色変えずに踏み倒し、土足で担当の領域に踏み込んでいることになる。それでもこの男はオグリキャップと共に皇帝とは別に覇道を唱えた。

オグリキャップがコイツに何か干渉したのか、それとも自前の才能で乗り越えたのか、どちらにせよ当時敗走した娘たちが憐れ過ぎる。できることならそれが知りたい。



——なるほど

眩くように、途方に向けて言葉を零す。

その顔は不思議と晴れやかで、ニヒルな笑みすら湛えている。

「…あ？」

——うん、私にはこうすることしか出来ない。奇遇にも我々の利害は一致している。

行こうか、先へ

一層笑みを深め、どこもしれないナニカに笑いかける。目の前で何を演じられているのか何一つ分からないが、ろくでもないものに片足が浸かったと怖気が走る。

「おい、誰と話してるんだ…」

——カフェにタキオン、そして”君”。”君”がいることで奇しくも彼女たちの道筋が交わった

声をかけても反応はなく、虚空を眺め、うわ言のように言葉を紡ぐ。目の前で行われるスプラッター映画は今まで観てきたものを遥かに凌ぐ。

先程までまちまちに座っていた客は皆、煙のように消えてなくなっており、マスターすら席を外している。

「おい…」

——…あれ、すみません、急にぼうつとして…

我慢ならず、乱暴に肩を殴り付ける。迷惑そうに顔を顰めた後、ゆらゆらと何かを逡巡するように頭を揺らし、まぶたを落とす。

落ちたまぶたがゆっくりと開けば、湖面のような瞳が帰ってきた。

「…今日はもう休め。出来れば明日も休んで欲しいくらいだが、お前の場合そう言ってられないからな」

——すみません、私からお願ひしましたのに…

そう言つて頭を垂れる。そのゆらゆらとした幽鬼のような動きに先程の様子が重なる。落ち着くための時間が欲しかった。

「いいから、行け」

——す、すみません、お代を

「ここは持つ」

——…ありがとうございます

悪い事をした。余裕をもてと言つた舌の根も乾かぬうちに自分が余裕をなくしてどうすると自嘲気味に笑う。

今のはなんだったのだろう。突如として雰囲気異質なものになった。そして本能がそれを全力で拒絶した。

「…しっかり休めよ」

彼に対して申し訳ないと思うと同時に、あの現象に狼狽するのは仕方ない事だと自分を許すように、この場を去った背中に呟くように声をかける。

もう一杯飲んでから引き上げるかと、ちょうど奥からグラスを持つ

て出てきたマスターに注文を取ろうとすると、椅子にかけたジャケツトから電子音が着信を知らせた。

誰かとのやり取りを欲していた彼にとって渡りに船の出来事だった。

だが、その浮き足立った心持ちも途端に絶対零度の見えない眼光に凍りつく。

学内のイントラネットを利用した言伝だった。

『沖野トレーナーへ』

夜分遅くにすまない。

携帯電話をお借りして連絡をさせてもらっている。

”彼”と接触したそうだね。どういった話をしたのか仔細教えてくれないだろうか。

詳しくは会って話そう。こちらの時間を空けるから、君の空いている時間を教えてくれないだろうか。一両日中に返信を頼む。

生徒会長 シンボリルドルフ』

夜の帳がすっかり降りてしまつて、大人街道も賑わっている。その間を縫うようにして背中を丸めて帰路を往く。その足取りは重苦しい。その原因は明白だ。

何か粗相をしでかしたのだろうか。いやまあ、先輩を前にうたた寝など言語道断だと言うのはわかるが、あまりにも対応が変わつていた。逆鱗に触れるようなことを口走つてしまったのかと戦々恐々だ。折に触れてまた謝ることしよう。

また、うたた寝をしたことで心配させてしまったのか、この他強く休めと言い含められた。今回の件のようなことが起こらないよう、しっかりと休息を入れるように心がけよう。

とは思うが、うたた寝の際に見た夢現も定かではない、記憶も臆気なあの会話。何か重要なことを話した気もするし、そうでない気もある。

サファイアの海、どこかで見たことがある気がするのだが。

——早く帰って休もう

どうせ夢のことが気になつて眠れないだろうけど、と独り言ち、人の織り成す海をかき分けてその歩を早めた。

## 終わりの始まり

控え室は誰もが沈黙を守っている。

しかしそれは緊張から来るものでは一切なく、研究による寝不足で仮眠をとっているタキオンと、私が差し入れたカフェインレスのコーヒーをなめるように口にするカフェエによって雑音の介入する隙がないからだ。

タキオンの寝息とカフェエがコーヒーを口にする密やかな音だけがこの空間を支配する。

こんな気の抜けた空間なのに呼吸すら許されないようで少し息苦しい。

先輩と酒を交わし、思いを吐露して幾日。タキオンが随分とトレーニングに意欲的になった。何かあったのかとそれとなく聞いたが、いつも通りちぎっては投げるように返され、気が向いたただけだろうと解釈せざるを得なかった。

だが研究の詳細などいつもは抽象的に説明するところを、最近は噛み砕いた説明をしてくれるようになった。

突然の変容に思うところが無いが、こちらとしてもタキオンを知れる良い機会となった。

カフェエに関してはどこか意味ありげな表情をするようになった気がする。口振りの端々に含蓄のある言葉をするようになった。

何か気に触るようなことをしたかとそれとなく尋ねたが、なしのつぶてであった。ただ、カフェエのオトモダチと私の練習メニューをこなすようになり、気まぐれな練習の要請がめっきり減った。

と言ったように二者二様に突然の変化が訪れた。私の許容範囲に収まってくれた、というのだろうか、初めて彼女らと、担当とトレーナーという形になれたような気がする。

それと同時に、不気味に潜む不安要素が見え隠れしている。例えば突然な練習スタイルの変更でパフォーマンスに影響はないかという

ところに比重が寄る。

ただそれに関して2人とも『大丈夫』という有無を言わせぬ鶴の一声で私を黙らせた。

結局無意識下でのストレスなどを忌避し、練習内容はあまり変更することはなく、通常運転でメイクデビューまで基礎能力と潜在能力を高めることに注力した。

結論としては、なんの問題もなくメイクデビューは走破できるだろうと相成った。

2人とも恐ろしく速い。オグリの育成を始めた時に似た衝撃と高揚感、そして焦燥感を得た。ただ、オグリ程完成されてはなかった。余裕綽々、我田引水を地で行くタキオンに脂汗をかかせる威圧を放つカフェは体調が常に変動し、体重までもがピンキリに変化する。体重の変異については嫌がることなく、当然のように記された紙を渡してきた。

——ありえん

そうこぼしたことを覚えている。

冬の木立のように儂さを身に纏い、いつか深淵から覗かれていてもおかしくないと思わせるカフェに嫌な顔をさせることに定評のあるタキオンは、——tachyon、その原子の名にふさわしい速度をもってターフに一筋の光明を残滓に残す。そして彼女の零すプランAとB。何を意味するかはまだ定かではないが、カフェへのこだわり様を見るに、そのどちらかにカフェが関わっていると睨んでいる。

いくつかの不安要素は浮き彫りになってきたが、今日を迎えるにあたって最善を尽くすことは出来たと思う。故に今現在私が抱える心配事と言えば、タキオンがレース後に準備しておけと言う茶葉——ではなく、カフェがメイクデビューに逃えて新鮮なものと要望してきたコーヒー豆——でもなく、オグリキャップだ。今日もしっかり着い

てきてくれているが、私と目を合わせようとしない。口達者では無い彼女は行動やその表情から何を考えているか読み取りやすいが、顔を合わせないとなると少々不便だ。彼女のレースもまだまだ残っているため、ここでのすれ違いは出来れば阻止したい。

メイクデビュー線を目前にして目下一番の問題がそれに出走する担当バではなく、トロフィーを乱立させるレジェンド級の担当バなのだから2人の気を引き締めるにもそれに見合った言葉が出てこない。

——2人とも、調子は

「私は…特に」

カップの底を見つめて動かないカフェはたおやかに面を上げ、静かに告げる。繋がれた管は今引きちぎられようとしている。

「私は眠い。トレーナー君、レース後の実験準備は君一人でするよ。うに手配しておく。完了次第起こしてくれ」

鋭敏な聴覚で拾い上げ、暗澹とした瞳がこちらに流れてくる。狂気に縛られた歯車は今震え始めた。

2人の異質な存在感は、まるで死神が私の首筋に鎌首をもたげているようだった。

逡巡している暇すら与えず、内臓に響くような衝撃が訪れた。

——怪人に狂人、怪物と、そろそろおなかいっぱいだぞ

「スカウトしたのは、貴方です」

「我々がそれを受諾したその瞬間に賽は振られたのだよ。トレーナー君」

2人は不敵にほほ笑みをたたえて控え室を後にする。不思議と笑顔で送り出すことが出来た。晴れて影を追うものの隠者となり、極地を追求する研究者の試験体となった。

「トレーナー」

——どした、オグリ

今まで沈黙を守ってきたオグリキャップが重々しくも口を開いた。レースの待機中に小腹が空くだろうとこしらえてきたおにぎりに一切目もくれずに、机を穴があく程見つめていたからその異常さは計り知れない。

あの二人は心当たりがあるのかあまり触れることも無かった。

「客席へ行くこう」

審判の時だ。直感的にそう理解した。

レース場への花道。自らを鍛え上げ、戦いの場へと赴くための最後の一本道。その道を往く1歩1歩が栄光に続いていると信じて、きつと生きとし生けるウマ娘はレースに望みをかけるのだろう。

「なんと場違いなことか」

「今更ですよね」

昨日の友は今日の敵。そして今日の敵は道標である。



「誰もがトウインクルシリーズに蹄跡を残さんと意気軒昂になっているさ中、我々は果てしなく遠い限界と幻想を追うのだからね」

「私は限界というものには興味ありませんが…」

「現実はいつも複合的だよ、カフェ。トレーナー君と君のお友達を間接的に我々の利害は一致した」

「あの子はそういうのでは…」

「下手の考え休むに似たりだ。いずれ分かる。何も今すぐに理解しろという方がお互いに失礼だろう」

「…」

「あつ今失礼なことを考えたな！」

期待と緊張に震える空気をもともせず、無駄口を叩きながらその歩を進める。

集中を高めるウマ娘たちから非難の視線を受けるがすぐに畏怖のソレに変わる。その肢体からは抜き身の刀身のような冷たさを放っているからだ。

「さて、現段階で必要なものは全て揃った。不器用なトレーナー君に關しては目の上のたんこぶだが」

「オグリさんが起こしてくれませすよ」

「口下手な彼女がねえ…あまり期待出来ないと思うが」

「お友達も、そう言ってますし」

「…まあいい、必要があれば終身実験体として縛りつければいい」

「…良くない」

皆追われるように先へ行ってしまう、レース場への入場口に2人きりとなってしまった。ゲート手前から2人に向けて敵意と怯えの眼差しが向けられる。

それを柳に風と受け流し、1歩、足を踏み入れる。

刹那、レース場の空気が膨張した。

「さあ、実験開始だ」

圧倒的な光に、全てを呑み込む影。奇しくも先行に差し。挟まれた娘らに逃げ場はない。

カフェとタキオンがゲートに収まった。皆が緊張の面持ちでゲートが開くのを待っている中、2人だけ妖艶な笑みを浮かべている。中距離2000のデビュー戦。トウインクルシリーズへの挑戦権を得た者達が鎬を削る前哨戦だ。

「去年は私があそこにいたんだな」

ゲートを見つめ、うわ言のようにそうこぼす。横目にやると、耳は伏せられ、萎びた尾がゆらゆらとはためいている。

そのゲートが開いた。彼女らの長い戦の火蓋が切って落とされた。

「たくさんの応援を受けて、私はここまでやってきた」

——笠松の人たちもたくさん来てくれたよな

三三五五に自らの脚色に準じた位置を目指す。デビュー戦にしては少しペースが速いか。

上等とでも言うように、タキオンが真っ向から先行争いに完勝し、好位置につける。

逃げのウマ娘がさらにペースを上げた。

「隣に君はいなかったのだろうか」

——私は君の隣に立てていただろうか

カフェが先行バの最後尾に影となって潜む。レース全体のペースが早いにも関わらず、後ろから殺気じみた圧によってカフェより前のウマ娘たちのペースがさらに上がる。

差し、追い込みの作戦をとる娘たちも慌ててギアをあげる。

「トレーナー、私は君の期待に応えているか？」

——ああ

2人でレースの主導権を握ってしまった。これからは蹂躞になるだろう。

上げすぎたペースにスタミナを奪われ、逃げのウマ娘が垂れていく。垂れてきたウマ娘の壁が先行の娘たちの壁になる。同じく気力を奪われ、後ろから追い立てられた娘たちも殉ずるように垂れていく。

カフェもタキオンも条件は同じで、その顔に余裕はない。だが、お互い猟奇的な瞳で、その先を見つめて離さない。

影を追い越すその圧に、太陽への道がモーセのように拓く。

イカれた先行研究から得たクレイジーなコーナーリングで垂れてくる逃げウマ娘を躲す。

「私は、君には並べないのか」

——…誰から聞いたんだ？

最後の直線。2人並んでターフを波立たせる。

太陽は噛い、影は吼える。

「誰だっていいだろう、私は、君と」

——君が悪いわけじゃない。私が並べないんだ。私が不甲斐ないから

「…はあ？」

——君はこの程度で収まる器ではないんだよ

「…君と築き上げた功績の数々を」この程度”だと…？」

すぐ横の空気が膨れ上がっていく。垂れた耳は後ろに、尾は忙しく備え付けの椅子を容赦なく叩く。

背中に汗が伝っていく。

「君がどういう人間か、わからせる必要があるな」

隣を見ていられず、レースに視線を投げる。差は1バ身、光が影の

前を往くのは道理である。光さえ呑み込まんと猛追するがここまで。

「今回は、太陽に近づきすぎたようだ。」

幻想の羽を灼かれた怪人は、金細工のような瞳で科学者を見据える。

仄明るく狂気を火に焼べる科学者はそれを背にオベリスクを見定める。

——タキオンが勝ったのか

他人事のように言い放つ。今2人の勝ち負けに意味は無い。2人が信念を貫き通し、先に到達した時、そこでようやく勝敗が着く。今この瞬間はタキオンが近い、そう証明しているに過ぎない。

突然、視界がブレる。オグリの掌で両の頬を掴まれ、その膂力をもって立ち上がらされる。そう気づいた時には額と額が火花を散らしそうだった。勿論仮にそうなれば、片方は杏のようにひしゃげるが。

眉を寄せ、不機嫌そうに嗤い、こちらを睥睨する姿は“皇帝”に空目をした。

「トレーナーは私の一部なんだ」

——ここまでされると嫌でも気づく。私はそれなりの事をやったんだな

「それなり？笑わせるな、君は私の一部だと言っている。」

∴口下手だが聞いてくれ」

ひとつ呼吸を置き、こちらを見据える。

拗ねた子供をあやす様に、優しく微笑んだ。

「私は君を手放す気は無い。君と共にこれからも走る」

## 脈動

『オグリキャップが上がって来たぞ！オグリキャップ並ぶか！クラシック級に上がって初レースで皇帝の喉元を捉えるか！』

苦しい。

呼吸に余裕が無い。

視界もうつつすらボヤけてきた。

『残り400！その差は3バ身！届くかオグリキャップ！…いや、差が開いて…っ?!』

「1度息を入れるんだ。…離されてしまわないかって？離されるだろうねえ」

「なあに問題ないさ、君が成るとしたらそこだ」

不思議とその瞬間のやり取りを思い出した。

”彼”はそう言い、笑った。

ならば信じよう。

真空に穴を開けた。

全身の血が心臓に押し寄せる。

身体が震えた。

ウイナーズサークルにて、雑に『良い走りができた』と詰めかけた記者数名に返し、控え室へと踵を返す。

もう少し詳しくと食い下がってくるが足早に切り抜ける。

「鬱陶しいなあ全く、答えたのだから良いじゃないか」

「記者の方々も注目してくれているんです…」

背後から溶け出す自分のものではない影に寒気を感じる。  
相変わらずだなど肩を竦める。もつと普通に出てきて欲しい。曰くいつも通りにしているだけとの事だが。

「今の私たちの走りに魅せられた顔じゃないよ、アレは」



「…なるほど」

言外に、貴女のトレーナーは如何ですかと聞かれているようなものだった。

一応直接聞くのは憚られたのか、遠慮がちに遠回しに質問をぶつけられたが、ここまでだといっそ失礼だと思う。

【雲隠】トレーナーねえ…伊賀や甲賀で名を轟かせそうな渾名だ」

「…忍者、ですよ。轟かせてはいけないのでは」

【雲隠】トレーナー、散々オグリキャップの影に隠れたことで、オグリキャップの芦毛を雲と評して名付けられた渾名である。

巷では影の功労者、もしくは隠居人と呼ばれ、一長一短の評価を欲しいがままにしている。

「彼ものつぴきならない状況にいるからねえ…」

「タキオンさんはトレーナーさんがどうして表に出ないか知っているんですか…?」

「んん、まあね。それこそそのつぴきならないことがあってね」

「へえ…」

知りたいかい?とばかりに振り返る。金糸の瞳は案外どうでも良さそうだった。

「それって…私たちに関係ありますか…?」

常軌に戻る科学者は、いつだって常軌を逸することが出来る。  
口元は歪み、戦慄きながら弧を描く。

「…くくつ、そうだね。我々の懸念している問題は”そもそも関係ない”のさ！」

私としたことが合理的な取捨選択を忘れていたよ。随分と彼に絆されたものだ」

歡喜に打ちひしがれ、押し殺すように笑みを深める。

そうだ、賽は振られた。私たちは私たちの道を往くのだ。

彼が持つ問題は彼が抱いて解決するなり共に沈むなりすればいい。

「はい…”トレーナーさんとあの子”と一緒になら、辿り着けるはず…」

相も変わらず茫洋とした目はどこに向かっていいのか分からないが、今回に限っては一言申したいところだ。共に先を目指すか決めたというのに除け者扱いはいただけない。

「んん…、そこに私を入れてはくれなかったのかい？」

「余地ないですよ…」

「えー、そんなこと言わずにさ、私と君の仲じゃないか！」

「別に…親しくなった覚えはないです」

「えー！私と君ははぐれ者同士理解し合えて…はないか。それでも——」

揺れる影に縋る思いで視線を投げる。——心底面倒くさそうだ。

「それなりに気が合うと思っていたんだけどな?!」

「そうですか、私は別に、ですけど…」

レースに負けた相手という事実も後押ししたのか、目に見えて機嫌が悪そうだ。以前はこのような姿をあからさまにしなかったが、どうやら今は往来初めて表立つほどに虫の居所が悪いらしい。…そのラストレーションが筋肉、精神に有意なはたらきを見せるのか非常に気になる。実験、受けてくれないだろうか、無理だろうかなあ。

「おかえり、いい走りだったな」

控え室の前に小脇にトレーナーをしまい込んでふわりと笑う芦毛の怪物が立っていた。

トレーナーは観念した草食動物のようにされるがままだ。

何故か膨れ上がった頬に、干された布団のように垂れ下がった頭と足が哀愁を漂わせる。

殴られてもしたのだろうか。まさかあるまいとは思うが。

「トレーナーさん…?」

「ああ、今少し分からせているところだ。自分の力をまだ分かってない。いや、まあ、わからないでいてくれる方が助かると言えば助かるんだけどな」

困ったように笑う彼女は抱えたまま空いた片手で額をこつこつと叩く。

「会長の件だねえ…。理解者とは言うがそれは依存と表裏一体。百術千慮の会長殿がまさかその対象を欲しているわけでもあるまい」

「欲が出たのだろうか、ルドルフは」

「会長さんが…？あまり考えにくいですが…」

「ふむ、今の生徒会に粒が揃ってきたとは思っていたがなるほど、むしろ欲しいものが増えたのか」

ナリタブライアンを生徒会に引き入れたという広報に生徒たちが色めき立つ最中、苦虫を噛み潰したように顔を歪めて重く息を零していた人間を脳裏に思い浮かべながら推測する。

「いよいよ執行猶予が切れたのだろうか、最近の生徒会の活動が活発になっている。まるで冬眠明けの熊だ。」

——粒ねえ…ゲテモノのパーティー会場だぜあそこは。私にそこに並べと言われてもどうしても見劣りするよ

「ククツ、皇帝に女帝、怪物2体に帝王。アレらを真っ向からゲテモノと呼べるのは後にも先にも君だけだろうねえ。そういう意味では君もあの魑魅魍魎の一員と言っても差し支えないだろうさ」

「自分のことを棚に上げておいてよく言えますね」

「君、ブーメランって知ってるかい？」

「オーストラリアの先住民…アボリジニーの方々が鳥の狩猟に使う道具ですね」

「正論言って楽しいかい」

「なんなんですか貴女」

3人のやり取りを小脇に収められながら聞き耳を立てる。

シンボリルドルフを筆頭に生徒会の私への執着について、彼女らはなにか心当たりがあるらしいがとにかく、そのお陰様で私はチームを組むことが出来ない。仮に組んだとして、皇帝を自ら我が軍門に下つて獅子身中の虫よろしく、軍権の全てを掌握されかねない。

そして何より、拒否権が存在しないのだ。

ただでさえ世の娯楽として柱となるレースに関して、世間の目がそこかしこに張り巡らされている。故に生徒会の一人、ましてやトップの参入は大々的に取り上げられるだろう。それを断ることが何を意味するのか、火を見るより明らかなのである。

彼女のトレーナーはチームを組んでいたはずだから、そんな滅多な真似はしないとは思うし、加えてメディアで忌み嫌われる私のもとで研鑽を積むとか瓢箪からウマ娘もいい所である。

だが念には念をと石橋を叩いて渡るのだ。いつそ叩き壊してしまいたい。

「トレーナー、次のNHKマイルカップ、出るぞ」

ようやくと自ら授かり得た両の足で立つことができたと思えば息がかかる距離で意思表示される。クラシック級に上がって初めてのレースだ。

まあそうなるだろうとトレーニングもマイル戦に合わせたものにしてきたし、問題は無い。先のURR杯は中距離だったし、スタミナの問題はない。後は出走バを見て作戦を考え、煮詰めていくことになるだろう。

——登録してある。調整もいい感じだし、問題なく走れるだろう

「ああ。——撫で切って見せよう」

URR杯では惜敗に喫したが今回はそうはいかない。あれ以降成長曲線が大きく上振れている。腹の中に眠れる獅子を飼っていたのだろうか。

瞬発力、敏捷性は持って生まれたものに磨きがかかり、ターフにダート、コンクリにアスファルトをぶち抜く脚力はラストスパートで真価を発揮する。

多くの期待と応援を背に乗せて、オグリはまだまだ成長する。その成長を目前に、最善が他にもあるのではと、自分の不甲斐なさに目を背けたくなることもある。

正解はない。ならば勝てば官軍、勝者が正しいのだ。

——また、やるか？

「い、いや、それは…」

URRファイナルズ決勝で魅せた煌めく彗星のような末脚。

オグリキャップのような強心臓と、それに耐えうる身体と精神がなくては成り立たないゴリ押し。超一流のアスリート達だけが到達できるという領域を無理矢理引きずり出す荒技は、勿論諸刃の剣。

レース後の瞳孔は開きっぱなしで息も荒く、擦り切れた精神は判断力を鈍らせ、なおも体内で燃料を投下しているかのように体表から蒸気が立ち上っていた。

誰もが近寄り難い状況だった。

「やめたまえトレーナー君」

大錠を振るうように会話を打ち切られた。無然とした態度でこちらを見据える。その目には確かな警告灯が灯っている。

「アレは殆ど暴走だよ。体内の水分を昇華することで無理矢理放熱していたんだ。ふらつきや意識の混濁を見たらどう？ 脱水症状のレッドゾーンだ」

まあ大事に至らなかつたけどさ、とあとからつけ加える。

多分、一番その姿を見たいのはタキオンだろう。何せウマ娘の限界に今一番近いのはオグリだ。研究対象としても申し分ない。それでも限界への到達という至上の命題を取り下げ、選手生命を慮る器を持つている。彼女のクレイジーさはかねてよりのものだが、分別をわきまえている。

——忠告痛み入るよ、タキオン。

でもね、オグリならいけるよ

「ほお、根拠はあるのかい？ 根拠もなくものを言っているわけではあるまい？」

胡乱気な瞳に不穏な明かりを灯して、苛立ちを隠すことなく言葉に含めてぶつけてくる。まるでこの間に対する一分一秒が君のトレーナーとしての品位に直結するぞと言わんばかりだ。根拠はあると言えはあるが、強くない。

——…応援とか？

「…はあ？」

結局沈黙にいたたまれなくなり、ポロリとこぼしてしまっただが、実際これに尽きるのだ。普通期待の声が大きくなれば緊張に余裕が無くなったりするが、オグリにはそんなものは関係なかった。『応援：いいな、これ』と武者震いと共に目付きが変わる。

——オグリは皆の期待や声援に応える娘だ

「…ほう。少々意味がわからない理論だが、それでオグリキャップ君は限界を超えたと言うんだね？」

限界を超えた、という点ではどうだろうか。そこでは私とのやり取りが鍵となった可能性もありうるが、ジュニア級から上がったばかりの完成しきっていない体躯でソレを可能にし、闘えたのだ。応援という形が肉体を超えて作用したと考えると問題ないだろう。

まあ現時点で研究至上主義のタキオンには難しいところだろうか。

——いずれきつとわかるよ。君の速さへの盲信に最初に惹かれたトレーナーが私というだけで。君達も声援を一身に受ける器を持つてるよ。

私も君たちにおいて行かれないようにしなければね

さて虚空に亀裂が入る音がした。自嘲的に語ったが刹那、宙ぶらりんの両手足に重りがつけられたように自分のものではなくなる。

うん？宙ぶらりん？

「まだこの口は」

「オグリさん…それはさすがに危ないです…！」



「おいおい血気盛んなことはいいが、それをトレーナー君にぶつけるのはいただけないよ」

普段の温厚な彼女からは見当もつかない、眉間に皺を寄せて目尻を吊り上げる様子は、適当なことを言えば喉を締め上げてきそうだ。カフエとタキオンの注意もあつて腕力によつて浮遊状態にあつた身体に自由が戻る。

「トレーナーさん…私たちはいつも隣にいます…。何処を、見てるんですか」

責めるように、不服そうに問う。

答えは決まっていた。

——その先だよ。君たちの未来に泥を塗らないようにしなくては

「未来のことなんて…分かりっこないでしょう」

——分かるよ

有無を言わせぬその宣言。異質な圧力に三者の耳が跳ね上がる。澆刺とした笑顔で3人を見据える。

——さア、ここからがスタートだよ

ぬるい風が辺りを包む。レース後だというのに風をぬるく感じるとはこれ如何に。

妄言ともとれる成功の確信。盲信者は3人のその先、途方を見つめて恍惚とした表情を浮かべている。

それだけの期待と責任を縫い付けられたにもかかわらず、心臓は早鐘を打つ。———どうやら十分に絆されている。

2人は一笑に付すのだった。

## 青い春の兆し

「トレーナーさん、分かりますね？」

——すみません…

荘厳な扉を前に深呼吸を4度5度と繰り返していたところ、おもむろにその観音開きの扉は開いた。

ちやうど朝日が昇り、理事長の椅子の後ろからは清々とした陽光が射し込んでいた。座してこちらを真つ直ぐに見据える小柄な体軀をした少女は困ったように笑う。

「謝るだけじゃ分かりませんかよ？さ、さ、お掛けになってください」

——…はい、失礼します…

言葉は柔らかく、朗らかに微笑む姿はとても可愛い。初対面で私はその笑顔に射抜かれたと言っても過言ではない。——だが。それが般若に見えるようになったのはいつからだろうか。

「お茶お入れしますので、少々お待ちくださいね」

——あ、お構いなく…

「春の陽気が来ているとは言え、まだまだ寒い朝なのですから、どうぞお召し上がりください」

——恐縮です…

まだ2月。三寒四温の日々で春の兆しは見えない訳では無いが、春のほだされるような陽気は本年未だ感じたことがない。

今の言葉をゆるっと訳してみよう。

『ぬるま湯に浸って痴呆が進んだなら現実見せて差し上げますのでちよつとゆつくりしていつてください』

…こんなところだろうか。

以前は浮き足立つ思いでこの部屋に用もなく訪れ、たづなさんと理

事長と共に茶菓子をつまみながら談笑の時間さえあったというのに。今考えたら無礼もいいところだが、お互い悪い時間ではなかったはずだ。

「さ、入りましたよつ。理事長もどうぞ」

「うむ、かたじけない」

眼前では理事長とその補佐のたづなさんの穏やかな空間が広がっており、見るもの全ての心をノスタルジーにするだろう。いや、私を見たあとだと温度差で風邪をひくかも知らんが。

「トレーナーさんもどうぞ」

——…なんか大きくないですか？

「気のせいです。ふふふっ」

彼女らのお茶はシンプルかつ細部に意匠をちりばめた清らかな湯のみであるが、私の前に出されたのは大きなマグカップ。なみなみと注がれたお茶は、表面張力に震えている。また何に気を使っているのか、ソーサー付きだ。ティーカップならまだしも、このサイズ感だとラーメンの受け皿を彷彿とさせる。

「担当の子達がコーヒー党と紅茶党らしいですね。被らないよう、緑茶をば」

——恐れ入ります…

「まあ、そんなかしこまらずとも、私との仲じゃありませんか」

——えっと…はは

「うふふっ」

『こちらからは話を振らぬ、さ、話せ』

眼光がそう言っている。

こんなはずじゃない…こんな所じゃなかったはずだ。ここは私に

とって癒しの場だったはずだ。それが何故こんなことに！

頭を抱えて蹲りたい衝動を押さえ込み、何とかその視線を一身に受ける。カフェやタキオンのようなどこか異質なものではなく、スツキリとした威圧だ。眼光ソムリエでも始めようかな。

——新しい担当が無事デビューしました。：すいません、報告しましたね。

「う、うむ！コースレコードに迫る結果だったと聞いている！」

もしかして報告がいつてなかったのかと懸念して聞いてみたがしつかり報告されていたらしい。泥濘のように沈んでいた瞳が据わったところを見ると、次は無さそうだ。

なんと理事長の耳にも届いているらしく、キラキラと輝く瞳で見つめられる。

——担当の子達が優秀ですからね。造作もないことです

「否定！あの場には時代の申し子になるやもしれない娘たちが多く並んでいた！その者達に完勝せしめたのは正しく君の担当であり、そして担当バたちを導いた君の実力である！」

——恐れ入ります

思っている以上の高評価を貰ってしまった。身に余る理事長直々のお言葉を賜ってどうも落ち着かない。

理事長はいつも過大評価をくれるので、こちらとしても少々受け方が慣れてきたものである。

「いほん」

——記者会見の件でしよるか

矢のように放たれた咳払い是我々を黙らせるのに十分だった。

目を逸らしながら心当たりの大いにあるものをおずおずと口にす

る。

オグリと2人を伴ってレース場を後にし、打ち上げに喜び勇んで歩を進めた先にあった記者集団。その好奇心の視線を一身に受けながら応じた質疑応答。

黄色い声で担当ウマ娘に対する評価を口々にするもの、好奇の瞳で次走はどこかと問うもの、不躰にメディアに出ない理由を聞き出そうとするもの。十人十色の質問攻めに遭った。

結局、そういつた場に出る機会をみすみす逃してきた私にとって経験値が足りる訳もなく、要領を得ない素人な受け答えになってしまった。

帰り道オグリにすごく同情された。

なにせよ、それによって記者達からの評価がだだ下がりしてしまったのだ。それがトレセンへ報告され、匿っていた割には大したことの無い素人トレーナーではないのか、という批判が来たのだろう。

要は私に対して『これ以上担当の才能を鼻にかけるのはよせ』という警告なのだ。

しかしたづなさんは眉をひそめ、困ったように頬に手を当てた。どうやら当たらずとも遠からずといったところらしい。

「…まあそれもありますが、それに関しては今更でしょう」

——では何を

「チームの登録です」

——チームですか？

思っていたところとは全く違う角度から矢が飛んできた。しかしチームとなればもう少し人数が必要なはず。確かに担当は優秀で、特例を与えるに値するというパターンが考えられない訳では無い。また、チームを組まないことは前々から伝えている。

「はあ、どうやら本当に知らないみたいですね…」

——すみません、心当たりが…



伝わってくる。

目の前が霞んできた。

——担当3人請け負ってるんですが

「ではチームを組みますか」

——……いいえ

「アオハル杯出場されますか」

——…………はい

「はい、承りました！ご健闘をお祈りしますねっ！」

弾けんばかりの瑞々しい笑顔。私はそれを歪んだ笑顔で受け止めるしか無かった。

一切目線を合わせない理事長が印象的だ。

たづなさんになにこやかに見送られながら理事長室を後にする。

扉を閉めた途端に脱力感と目眩に苛まれ、すぐ側の壁に寄りかかる。

迂闊だったとはいえ、ここまでやってくるとは。

アオハル杯は短距離・マイル・中距離・長距離・の全距離とダートを加えた5種目をチームで闘う。マイルはオグリに任せれば勝てるし、中長距離はタキオンとカフェの脚質に合ってると思うからそれらも問題ないだろう。

しかしこれで私は嫌でもチームを組まなくてはならなくなった。この状況、どの連中が好むかと言えば明白だ。

小さく舌打ちをし、踵を返す。

降って湧いた面倒事はひとまず置いておいて、優先事項に思考を走らせる。次のレースはオグリのNHKマイルカップ。アオハル杯のチーム編成に関してはその後でも遅くないだろう。

アオハル杯にはさっさと敗退して戦線離脱するのもいいが、オグリや2人に付いているファンを逃すのは惜しい。

ままならないものだ。



「アンタ、チームを組んだらしいな」

トレーナー室へ入るや否や、藪から棒に問いただされた。

ソファアールから肩越しにこちらをうかがう猛禽類のような瞳。生徒会が一角、ナリタブライアンだ。

チーム編成に関して考えるのは後だと決めた途端にこれだ。息づく暇もない。

——随分と耳が早くないか

「まあ知ってたからな」

だろうな。手回しはシンボリドルフによるものだろう。

生徒会が理事長達と同等の力を持っている訳ではない。だと言うのに生徒会が理事長達に催促ができたのは、数々の面倒をかけた私に対して学園側から見返りを求めてきたという点で利害が一致したからだろう。

勝手に捺印したのはトウカイテイオーあたりか。アイツのデビューはまだだが、既に引く手数多らしい。レースで相見えるのが既に恐ろしい。

——それで？要求は

「話が早いな。観念したのか？」

——チームへの参入希望以外なら話を聞いてあげるよ

「フン、相変わらず頑固だな」

鼻を鳴らして腰をあげる。そのまま彼女は各トレーナーに用意された椅子に腰掛け、長机の傍らに置いてあったテレビのリモコンのス

イッチを入れた。

シンボリルドルフが記者会見を行っている。

訝しげに様子を伺っていると、突然ディスプレイが暗転した。

——なんなんだ一体

「知らない方がいいかもな。後々頭を悩ませることになるやもしれん」

——ここに君がいること理由だろう、知らなくては

後悔するなよ、とため息混じりに零しながら再度テレビの電源を入れた。

左上のテロップには、【生徒会から2名のアオハル杯出場決定】の文字。フラッシュは控えめに、場内のざわめきが中継越しにも分かってくる。

愕然とした。

『再度申し上げます。我々生徒会から副会長2名を、アオハル杯への出場を決定致しました』

突然の虚脱感。握力の喪失により、手に持っていた書類を全て床にぶちまけてしまった。

焦点をモニターから問題の片割れに移すと、リモコンを弄びながら挑戦的な目を向けてきていた。

「さて、どうする」

——クソ

モニターからは音声が続いている。取るに足らない程度の質疑応答であったが、とある女性記者——知り合いの質問が嫌に耳に着いた。

『チームは何処か決定されているのですか？』

——まさか

『一応目処は着いております。が、まだ確認を取れてないので結果が出次第追ってご連絡させていただきます』

『確認が取れていない…承知しました。ご報告お待ちしております』

——アイツっ…

トレーナーたちの中で、あからさまに生徒会との連絡網を絶っているのは私だけであり、それは既に記者団の方々にも漏れている。つまり今ので2人が所属する予定の担当チームが、私が受け持つものであることが割れてしまった。現に記者団からどよめきが上がり、困惑の渦となっている。

渦中の彼女はカメラ越しに私を見据える。比喻でも何でもなく、私を見ている。飄々とした、それでいて苛烈さを秘めた瞳は、私に一歩二歩と後退ることを強制した。

『いい返事、待ってるよ』

穏やかに微笑みながら告げられる。

言葉に含まれた熱に膝が折れた。

——『はい』以外の選択肢を奪っておいてよく言うよ

「アンタに対してだけは皇帝も形無しだな」

——独裁者だよ

「アンタの望む、年相応の振舞いじゃないか。皇帝サマのわがままなんぞそう受けられんだろう？」

——規模が違えや…

「くくっ、返事はいつでもいい。精々ご機嫌取りに励むことだ」

もはや返事は決まったようなものだが、ここでは負けた気がするの  
で口を噤んで揺れる尾を見送った。

知らない方がいい、それはつまり、知らない方が衆人環視を関係なくアオハル杯に挑めるということか。

危うく後ろ指を刺されながらアオハル杯に挑む。ピエロになるところだった。ナリタブライアン、えげつない奴だ。

アオハル杯出場決定からわずか15分。

怒涛の展開にキャパシティが耐えきれず、私は立ったままはらはらと涙を流した。

——無力だ……

## 神域

桜前線がやってきた。

また多くのウマ娘達が学園の門戸を叩き、ターフに夢を描く。  
淡く色付いた桜は、その門出を祝うように咲き乱れている。

3月下旬、例年より2日ほど満開が早いと報道で聞いた。それはもう例年通りということでは良いのではないかと無粋に思わせるが、この季節がやってきたと思わせる一幕だ。

学園を彩る桜並木を写真に収めるウマ娘や、新入生だろうか、緊張と期待を合わせたような面持ちの者が足並み揃えて校舎に飲み込まれていく様を私は虚ろな目で眺めていた。もういつからやっているかもあやふやになってきた。

ベンチでうつけたように桃色の虚空を眺めていると、すぐ隣で行儀の良い足音が止まった。

「トレーナーたる者背筋くらいしやんとせんか、たわけ」

目線をやると、パリツとした制服に身を包んだエアグルーヴの姿があつた。ここ最近ジャージやブルマ姿しか見ていなかったため、少し新鮮である。

——ええ、ええ、分かってますとも

春の陽気をもものともせず、どうも口が重々しい。

腰を上げたいのは山々だが、手帳に記された予定を思い出す度に尻から根が深く張るのだ。

「分かっているなら直さんか。今日は全体トレーニングだろう、いつまでそうしているつもりだ」

——本当にやるのかあ……?」

「当たり前だ！今の今までは貴様の方針を飲んでいたが、よく良く考

えればチーム結成から1ヶ月と半分！この期間で顔合わせすら無いとはおかしいだろう!？」

——だよねえ

おかんむりの女帝が言うのも最もで、今日はチーム結成して初めての全体トレーニング及び顔合わせだ。その事実が心持ちを陰鬱としたものへ変貌させる。

あの1名限定の絶対王政によって突如湧き出たチーム、”ユゴス”は色々な意味でその名を轟かせた。

何故かチーム”リギル”から一時的ではあるが移籍してきた【女帝】エアグルーヴに、【怪物】ナリタブライアン。

それをわざわざ記者会見で【皇帝】シンボリドルフが発表。だが、そのチームを受け持つトレーナーが【学園の絞りカス】私だ。

最近そう呼ばれるようになった。

その話題性は瞬く間に世間を席卷し、拒否は理事と生徒会に泥を投げることとなる以上、私から拒否権をひったくられた。

なし崩し的にチームが結成され、その旨を担当の3人に伝えたが、特に嫌がる素振りは見せなかった。むしろタキオンは好奇心に目を光らせ、よからぬ事を考えていそうなので注視しておく必要があるだろう。

「とにかく、今日は始業のスケジュールだ。いつもより早くトレーニングを始められるようセッティングしておけよ」

——仰せのままに

フン、と彼女は呆れたように鼻息を荒くしてこの場を立ち去った。

なぜ彼女達はあの敏腕トレーナーの元を一時的とはいえ離れ、私の元で走ろうと思ったのか。今の彼女達は大事な時期で、三冠路線とティアラ路線真っ只中だ。ナリタブライアンはレースに出て勝つことを目的としているが、親子二世のオークス制覇を掲げるエアグルーヴはこんなところで油を売っていて良いのだろうか。

考えれば考える程よく分からない。それにトレーナーがよく許可を出したな。私だったら【絞りカス】とまで言われるトレーナーに担当を任せたくないものだが。

うんうんと思いを巡らせていたが、ふと隣に影が落ちていることに気がついた。

——カフェ？いつの間に

「先程です。随分と考え込んでいましたので、勝手に隣失礼してます」

——ああ、まあね。この後の全体練習が憂鬱だな

「正直、私もあまり気乗りしません」

同じように虚空を見つめて重々しく口を開く。萎びた耳と尾はその感情を如実に表している。いつも無表情なカフェが分かりやすく気落ちしているところはなかなか珍しい。

——悪いなあ…巻き込んで

「いえ…仕方のない、ことです」

現段階ではオグリのレースが直近に控えているため、オグリにつきつきりになる日もある。また、アオハル杯に向けて連中とのコミュニケーションをとる必要もあり、中々カフェやタキオンのトレーニングに付き合えていない。もとより個人での練習を苦としない2人ではあるが、こちらからのサポートの質が落ち、他の娘たちと差が生まれていることに違いはない。

——落ち着いたら、どこか散歩にでも行こうか

「では、お供します…」

言葉少なに語るが、そこはかたなく雰囲気や和らいだように思えた。

どこかめばしい喫茶店でもあったのだろうか、もう少しコーヒーに

ついでに知識をつけようと思う今日この頃。

小さく会釈して立ち去ったカフェの後ろ姿を眺めていると、穏やかな時間がもつと続いてくれればと思うが、無情にも過ぎ去ってしまう。

——ああ、胃が痛てえ

「おや、それはいけない」

ぼんやりとした意識を一瞬で覚醒させた。その反動か、はたまた別の原因か、その声の主に視線を向けることが出来ない。

有り体に言おう、怖くて見れない。

相手以外を忘れさせるような眼差しを向けられ、全身が総毛立つ。筋肉が震え、奥歯が小さく音を鳴らした。

——シンボリルドルフ

戦慄く喉を震わせ、視線を合わせることなくその名を呼んだ。

「やあ、久方ぶりだねトレーナー君」

喜色に染まったような上擦った声。それとは対照的に、身を焼くような視線を受け、射すくめられたように足が動かない。往来備わった危険信号はけたたましく鳴り響き、震えとなって表面化する。

——……ああ、久しぶり。にしては随分熱烈な眼差しをくれるじゃないか

「ふふふ、私だって欲しいものを前にして、興奮を抑えられるほど成熟してないというわけさ」

——皇帝サマからのお墨付きはありがたいけどねえ

「おや仰々しい。以前みたクルドルフと呼びたまえよ。君にそう言わ



れるのは些か傷つく」

現在進行形で威圧してくる奴が何を言う。

なんとか言葉を飲み込み、一笑に付してようやく余裕が持てるようになった。

やはり他の連中に向ける穏やかな表情とは異なり、若干上気した表情に好戦的な目をしている。

——傷ついた様子はなさそうで何よりだ

「何せ話すのも久しぶりだからね。今回はこの当たりで溜飲を下げよう。次は頼むよ」

——仰せのままに

「適当だな……」

困ったように眉を寄せ、肩をすくめる。

これでもかと言うほどに根回しをし、袋小路に陥った私を的確に処するためのとどめの一撃も忘れずにこなした張本人が、実はこれほどまで表情豊かである。

——すまない、そろそろ行かなくては

やり辛さを感じ、足早にその場を離れようと試みる。極力生徒会の連中とは付き合っていたくないのだ。

「おいおい、つれないじゃないか」

そう言いつつ肩に腕をまわし、浮かべた腰を再びベンチに縫いつけ、共に座る形にされる。とてつもない力だ。

——痛い

「すまない、しかし君にはこれくらいししないとな」

そこいらの一般トレーナーと似たり寄つたりな体軀にウマ娘の膂力をたやすくぶつけないで欲しい。面識がそれなりにあるだけでそれ以外は他のトレーナーと大差ないのだ。

ただこちらとしてもいい機会が生まれたというもの。

——記者会見、アレはどういうつもりだ

「ふふ、些か奇を衒ってみたのだが」

不敵に笑みを向けてくるが、こちらの眉間には筋が刻まれていく。

「おっと、不服だったかい？」

——当たり前だろう

「君にはあれくらいしなないとどこかへ行ってしまうからね」

——にしてもやりすぎだ

言うことをきかなければ“こう”するぞと言えば、私は二つ返事で了承したはずだ。それをこの娘は“こう”したから言うことを聞けと命じてくるのだ。大層タチが悪い。

「四面楚歌、と言ったところか。面倒をかけてしまい申し訳ないな」

——本心から思ってるなら素直に受け取るんだけどね

「ふふふ」

知略を尽くした結果スマートさに欠ける結末を迎えるという意味不明な終わりを見せた彼女の作戦だが、これは序章に過ぎない。

これから始まるのは記者たちからの疑念と期待、そして粗探しに目を光らせる連中によるストーキングだ。

——しばらく夜道に気をつけなければ

「おや、エスコートしようかい？」

——うるせえ

くくくく、と堪えきれない笑いを口端から漏らす。手前味噌ではあるが、普段淑やかに笑う彼女は私の前では楽しげに笑うことが多い。一般トレーナーの端くれとしては嬉しい半面、疑問に思うことも多々ある。

懐かれることには悪い気はしないが、行き過ぎたものを内包する彼女はどこか近づき難く、信用に欠けてしまう。

——私がフリーならともかく、担当がいる身なんだ

「知っているとも。オグリキャップにマンハッタンカフェ、アグネスタキオン。この3名だろう？ 実に羨ましいね」

——ウマ娘の幸福を願うのだろう、私のスキヤンダルはそれを脅かすものに直結するぞ

そう言った瞬間、しまったと思った。馬鹿げた口上は目の前の娘を傷つけかねない一言だ。なにより、ヒトとの関係性をトレーナーを通して見定めるウマ娘達に一縷であっても”そのような”関係性の存在をチラつかせるのは危険なのだ。

だが当の本人は歯牙にもかけないように微笑み返してくる。

「安心したまえ」

——出来るか

頭ごなしに否定するのは良くないが、こればかりは譲れない。微々たるものであっても、記者団は尾ひれ背びれをこじつけて適当をでっちあげる。それを総叩きするのが娯楽のひとつとしてあるのが世間だ。

トレセンでそのようなことがなかったとは言えない。

それはこの娘も分かっているはずだ。

「過程はどうあれ私の望む形にはなるからね」

——……え？どうして？

「ふふふ、まだまだだね」

私の疑問には答えず、くすりと笑って立ち上がる。

「私もアオハル杯出場出来ればよかったのだが」

——勘弁してくれ！

「はははー」

悪戯に成功したように呵呵大笑し、手を振りその場を立ち去った。背面ながらそれに応じつつ、先程の会話を反芻する。

——……さっぱりだな

何が望み通りなのかは分からずじまいではあるが、どうやら厄介なことに私が関与しているらしい。

——先より今の話だ

目下何よりも大事なものはオグリのNHKマイルカップ。URAファイナルからかなり経ってしまったているが、マイル距離に合わせていく必要がある。

それが終わればカフェとタキオンの指針を決めて行かなくてはならない。遅いくらいなのだからなんとか効率よくやっていきたいところだ。

（——やらなきや行けないことが沢山だな）

以前はオグリが出るレース毎に何をすればいいのかと右往左往しながらがむしやらにひた走っていたが、今回はそうはいかない。

そこら一帯に地雷が埋めつくされているため、神経を尖らせていく必要がある。

オグリもカフェもタキオンも、彼女ら全員に個人のスペースがある。地雷をふむことと彼女らの世界を守ることを天秤にかけて優先すべきことなんて決まりきっている。

目の前が拓けた気がした。たどり着かなかった太陽に、我々は図らずも近づいている。

神は居る。私が造る。